

共同研究のおもしろさ

森宏一郎 Koichiro Mori / 滋賀大学 経済学部 / 教授
松下京平 Kyohei Matsushita / 滋賀大学 経済学部 / 教授
京井尋佑 Shinsuke Kyoi / 山形大学 人文社会科学部 / 講師*
*滋賀大学経済経営研究所 / 客員研究員

【はじめに】

本稿では、執筆された論文の中身を紹介することよりも、どのように研究してきたかに焦点を当てて、研究紹介を行いたい。研究の中身は公刊済みの論文を参照していただく方が良いと考えていることもあるが、著者たちの思いとして、とにかく研究における協働がおもしろいからである。そのおもしろさを伝えたい。

ノーベル賞級の先生たちしか研究のおもしろさを語らないのは良くないという思いもあり、研究プロセスに焦点を当てることにした。昨今、研究を目指す若者が減少してきており、もっと幅広く参画してきてほしいと思う。本学の学部生も大いに学問をしてほしい。

【共同研究の始まり】

共同研究の始まりについて書かれることはあまりないと思う。他の人たちの共同研究の経緯を知りたいという思いがあり、まずは自分たちが書いてみることにした。

本学の教員2人が含まれる3人による共同研究なので、自然な成り行きで共同研究が始まったと思われるかもしれない。だが、そんな単純には共同研究は始まらない。そもそも約10年前、別の研究テーマで森は共同研究に松下を誘ったことがある。だが、松下につれなく断られた。松下はこのことを覚えていない。研究者はそれぞれの思いやこだわりが強く、なかなか神経質であり、一般の人たちが思っているほど共同研究は容易ではないと、少なくとも森は感じている。

あるとき、学内業務で、松下と森が一緒になる。そのとき、松下が森に声をかけた。「農水省関係の委員をやっていて、農業における水利用の重要な研究をしたいのだが、手が足りない。誰か優秀な若手研究者はいないか。」森の答えは「いるにはいる。だが、いくつか重要な条件を飲んでくれないと困る。」だった。

その人物が京井だった。京井は滋賀大学経済学部を卒業していて森ゼミ出身である。この話が出た当時、京井は京都大学大学院農学研究科博士課程の最終

年に在籍し、何本かの査読論文を執筆している最中で、かつ、森と共同研究もしていた。京都大学で博士号を取得するためには、条件を満たした査読付き国際学術誌に3本以上の論文を掲載しなければならない。そのため、森が松下に出した条件は「京井を第一著者にして論文執筆を行うこと。京井に無茶苦茶な負荷を背負わせないように、森も共同研究に加わること。成果は査読付きの一流国際学術誌に投稿すること。」だった。松下は二つ返事でこれを了承した。

こうして、約10年の時を経て、松下・森は京井を加えて協働することになったのである。なお、結果的に、この論文の掲載時には京井はすでに博士号を取得したあとだった。

【研究における協働の面白さ】

役割分担がないわけではないが、本研究では論文執筆を分割して各自が個別に取り組むスタイルを取っていない。頻繁に対面・オンラインで集まって議論・作業を重ねているし、みんなで書くという非効率なスタイルで進めてきている。実際、Googleドキュメントを用いて、三人が同時に執筆できるスタイルを取っている。

そのため、研究開始から最初の論文掲載までに1年半ぐらいかかった。しかし、我々はこの非効率なスタイルこそが共同研究の良さやおもしろさを生み出していると考えている。以下では、松下・京井・森が本研究の協働について、それぞれ語ることにしよう。

松下:

特定分野に特化した研究を一人で粛々と行っていると知らず知らずのうちに視野が狭くなることがある。しかし今回は、天衣無縫に創造的なアイデアを出す森、睡眠が足りているのが心配になるほど研究をグイグイ進める京井、という強烈な個性の持ち主たちと協働研究する僥倖に恵まれた。

は極めて丁寧な分析・議論をおこない、私が見落としがちな点まで十分にケアし、常に研究を正しい方向へ導いてくれる。これらは私に未だ不足している部分である。二人と共に議論を深め、論文を執筆することで、私一人では生み出すことのできないアウトプットを生み出すことができたと認識している。

協働のプロセスが生み出すものは、アウトプットとしての論文そのものに留まることはない。私たちの協働では、一にも二にも、とにかく議論が交わされる。その内容は多岐にわたる。研究の進捗のためだけではなく、時にはコーヒーとケーキと共に雑談という形を取り、直接的に研究と関連しないものも扱う。論文に関わる技術的な話だけではなく、研究や学びに対する価値観、教育観や人生観、学生時代の思い出など、数えきれないほど多様な議論が交わされた。ここから、有形・無形を問わず、研究者としての私を取り巻くあらゆるものが創造される。このプロセスこそが、協働の本質であり、面白さの根源なのではないか。

無駄を厭わない、非効率的な議論の姿勢こそが、私たちの協働を面白いものにしている。研究を進め論文を出版する「だけ」に執着すれば、もっと効率の良いやり方はいくらでもあるだろう（間違いなくあるだろう）。しかし、それは面白いのだろうか。もちろん、否である。私たち三人の研究活動は継続中である。今後も、無駄にあふれた、非効率的で、面白い協働をおこなっていく所存である。

森：

三人寄れば文殊の知恵とはよく言ったものである。この三人で仕事していると、この諺を実感することが多い。松下はきわめて論理的かつ精緻であり、細かいところまで行き届いた議論をするのが得意である。京井はエネルギー量が大きく馬力があって、非常に丁寧に分析・解析をやったのけ、議論を誘発する気づきを披露する。私は全体像を描き出し、常におもしろさの

本質がどこにあるかにアンテナを立てながら、アイデアをつくるように心がけている。

この三人が議論しながら作業したり執筆したりすると、三人とも事前にはほとんど想定していなかったおもしろいものが出てくる。三人の間には補完関係があるとともに、三人の協働には創発がある。この創造する時間そのものが私にとって研究からの報酬になっている。加えて、三人で生み出したものを眺めているときも幸せを感じる。

1本目の論文の考察はそうやって生み出されたものである。また、2本目の投稿査読中の論文にある特殊な図は三人が激しく議論しなければ絶対に出てこないものだった。果たして、どう査読されて評価されるのか。現在査読中であり、楽しみなところである。

加えて、共同研究には研究者の参加トーンやノリも大事だと思っている。これらは共同研究の楽しさに影響する。松下は本気でNatureやScienceなどのトップ誌に論文を掲載したいと考えている。私はこれに大いに賛成だ。京井からはイグノーベル賞という話も出ている。これもいいじゃないか。大事なことは、三人とも「おもしろい研究をやらなきゃダメだ」という思いで完全一致していることだ。

【おわりに】

本共同研究の最初の論文は、査読付きの国際学術誌である Sustainable Development (IF 12.5 in 2022) に掲載されている。

Kyoi, S., Mori, K., and Matsushita, K. (2023). Solution of trade-offs between food production, water use, and climate change mitigation in global agriculture. Sustainable Development. <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1002/sd.2792>

